児童の郷土愛の醸成を目指すカリキュラム・マネジメント

― 小高連携による学校行事の再構成をとおして ―

新発田市立御免町小学校　主幹教諭　斎藤 崇人（平成 19 年度）

【私の主張】

「郷土愛の醸成」は当校の学校経営方針の中核である。従来の地域学習や地域との連携を尊重し、新たな地域資源である学区内の高校生との関わりを学校行事に位置付けた。実践後、地域への興味を示す回答の割合が上昇した。振り返りには、演劇部の高校生の道具作りや声の届け方、日々の練習を興味深く捉える記述が見られた。小高連携をとおして地域を見る視点を広げることが、地域を肯定的に捉えるきっかけになったと考える。育てたい児童の姿を基に実施内容を検討し、関係者との調整をとおして学校行事を再構成するカリキュラム・マネジメントは、地域を肯定的に捉える学習機会を生み出し、郷土愛の醸成につながると考える。

１　研究主題の設定

当校は、各学年の総合的な学習の時間や生活科をはじめ、学校行事、保幼小及び小中連携等をとおして、地域との関わりを重ねてきた。こうした取組を更に充実させるため、当校の学区内にある新発田農業高校と新発田南高校に着目した。身近な高校で学ぶ高校生やその活動を知ることは、「自分たちの地域では、このようなことを学んだり、活動したりできる」という気付きにつながると考えた。そこで、児童が地域のよさや可能性を捉える新たな機会として高校との連携を学校行事に位置付けた。昨年度までの作品鑑賞を中心とした「展覧会」を再構成し、今年度は児童の作品鑑賞に加え、児童や高校生による発表、高校生との質疑応答等を取り入れた「町小文化に親しむ日」を実施した。

文部科学省（2017a）が示すカリキュラム・マネジメントの３つの側面、すなわち教科等横断的な視点からの教育内容の組織化、教育課程の実施状況の評価・改善、人的・物的な体制の確保・改善の視点から、校長の指示を仰ぎながら主幹教諭として、児童の郷土愛の醸成を目指す小高連携の在り方について学校行事の再構成をとおして探っていきたいと考え、主題を設定した。

２　研究仮説

> 高校生との関わりをとおして地域を見つめる機会を設ければ、児童は地域のよさや可能性に気付き、郷土愛を醸成するであろう。

地域のよさや可能性は、自然や歴史、文化だけでなく、そこで学び、活動する人の姿にも表れる。高校生は、児童が自分の成長した先の姿を思い描くことのできる存在である。その高校生の活動や学びを知ることで、児童は「自分たちの地域には、こんな人がいる」「この地域では、こんなことが学べる」と気付き、地域を見る視点を広げられると考えた。こうした新たな気付きが、地域を肯定的に捉えるきっかけとなり、郷土愛の醸成につながると考えた。

仮説の検証では、地域への興味の回答変化と児童の記述を関連付け、高校生との関わりからどのような気付きや、新たな視点での地域の捉えが表れたかを確かめる。

３　研究内容と方法

（１）郷土愛の捉えと、児童の振り返りの記述を読み取る観点

道徳科で示される郷土の文化や生活への親しみ、愛着等（文部科学省、2017b）を踏まえ、本研究では「郷土愛」を、自分に関わる場所として地域を捉えて「大切にしたい」「これからも関わりたい」という想いとする。「醸成」は、地域の人・もの・こととの関わりを自らの生活、成長及び将来と結び付け、その想いを育む過程とする。「文化」は伝統芸能等に限定せず、暮らし、産業、技術、価値観及び人とのつながりを含む生活文化として捉える。

本研究で「地域を見つめる」とは、高校生との関わりをとおして、地域で学ぶ人やその学びを知ることである。「地域のよさや可能性に気付く」とは、「この地域ではこんなことを学べる・できる」「近くにいる高校生は、すごいな」と捉えることである。こうした気付きを基に、児童が自分の地域を肯定的に捉える姿を、郷土愛の醸成につながる姿として読み取る。

相良・児玉（2025）は、高校生による先輩からの講話やプレゼンテーション指導、授業サポート等における小高連携を報告している。また、村山ら（2020）が示した地域の人との交流と地域

愛着との関連を参考に、身近な地域で学ぶ高校生との関わりをとおして、地域への肯定的な捉えを育むことを目指した。

ただし、進路への憧れと地域を肯定的に捉えることは区別する。記述は、①地域を知る、②地域で学ぶ人とその学びに気付く、③地域のよさ・可能性に気付く、④地域を肯定的に捉える、の４つの観点から読む。また、これらは発達段階や到達順序として捉えない。

（２）実際に行った調査と分析方法

児童アンケートの設問・選択肢を別紙１に示す。地域【町小学区や新発田】への興味について、１学期、行事直前、行事直後の３時点で４段階回答を分析した。１学期と直前・直後では設問の文面が完全には一致しないが、地域の範囲と選択肢の意味を対応させた。４＝とてもそう思う、３＝そう思う、２＝あまり思わない、１＝思わないとし、３・４を肯定回答とした。

３～６年生 12 学級を対象に、学年・組・氏名を照合し、同じ児童の１学期・行事直前・行事直後の回答をそろえた。３回の回答がそろった 292 人のうち、回答時期や当日の観覧状況が不十分な６人を除き、286 人を主な分析対象とした。１学期に複数回回答した児童については、最後の回答を採用した。

４段階回答の３時点全体の差をフリードマン検定、各２時点間の差を両側ウィルコクソン符号付順位検定で検討し、３組の比較にはホルム法による補正を行った。ウィルコクソン検定では、変化のない回答を順位計算から除き、同じ大きさの変化には平均順位を用いた。また、重複回答や保留記録の扱いを変えた感度分析、符号検定、学級単位の確認を行い、結果の安定性と変化の方向を複数の方法で検証した。

自由記述は、直前の「高校生について知っていること」と、直後の「新しく知ったこと」「これからしてみたいこと」を照合した。１学期には同じ自由記述を実施していない。１・２年生は事後の個人対応がないため、学級・学年集計と聞き取り記録を用いた。担任のメモや板書記録の写真を基に、筆者が原表記を保持して転記し、記録量を人数や学びの程度として扱わないようにした。

本稿では、児童の回答変化を自由記述、当日の質疑、協議・運営記録と関連付けて検討する。取り上げる事例は全児童を代表するものではなく、質問した児童と記述した児童の同一性も確認していない。教職員の振り返りは、今回確認できた中間分析に限る。

４　研究の実際

（１）ねらいを保ちながら実施可能な形へ見直す

当初は農業・工業等の専門的な学びをステージとブースで紹介する構想であった。高校側の年間計画、休日の職員体制、１～６年生を対象とする条件等から実現の可能性を再考した。その結果、ブースを見送り、演劇・ダンス部のステージ発表へと見直した。当日は、高校生が取り組む表現活動に触れ、身を乗り出して食い入るように発表を見つめる姿が見られた。

初年度は全員で１から企画する負担を避けるため、筆者が基本となる形をつくり、今年度初めて行う行事の実際と児童の姿を知ることを今年度の目標にしたいと考えた。第２回の職員打合せでは、計画の変更点と検討課題を共有し、高校生との出会わせ方や、地域の新たな見方につなげる方法について意見を求めた。職員から出された意見を整理し、高校生・顧問と実現できる内容を相談した。

（２）職員打合せの意見を生かした当日の実践

児童の作品は事前に鑑賞し、当日は、４年生合唱、開会式での特別支援学級在籍児童によるキャップアートのお披露目、児童が所属する地域のクラブ活動である金管部、安兵衛太鼓部の発表に続き、南高校は演劇を、農業高校はダンスを実演した。職員打合せで出された意見を基に、児童が高校生の活動や学びを知る機会となるよう、高校生の紹介・掛け合い、発表、児童からの質問を組み合わせ、閉会式後、各教室で事後アンケートを行った。

演劇後には、道具の作り方や材料、題材を選んだ理由、声を届ける難しさについて児童からの質問と高校生からの回答があった。ダンス後には、上手に踊る方法や滑らかな動きについて児童が尋ね、放課後の仲間との練習、日々の練習、好きになって楽しく踊ることが高校生から語られた。発表を見るだけでは分かりにくい、制作や練習の過程に触れる時間となった。

５　成果と課題

（１）結果として確認された児童の姿

表１　地域への興味の３時点の推移（肯定回答数／分析人数（割合））

対象	１学期	行事直前	行事直後
３～６年生・同一児童	234／286（81.8%）	218／286（76.2%）	254／286（88.8%）
１年生・３学級集計	83／89（93.3%）	67／86（77.9%）	83／88（94.3%）
２年１組・学級集計	32／33（97.0%）	人数未確認	32／32（100.0%）
２年２組・学級集計	30／32（93.8%）	32／33（97.0%）	33／33（100.0%）

３～６年生では直前から直後へ 12.6 ポイント増加した。４段階回答は上昇 90 人、不変 179 人、低下 17 人で、12 学級すべてで上昇者数が低下者数を上回った。３時点全体に差があり（フリードマン検定、Q＝37.58、自由度２、p＜.001、Kendall の W＝.066）、直前・直後の比較も上昇を支持した（ウィルコクソン検定、T＝957、ゼロ差除外後 107 人、ホルム補正後 p＜.001、順位双列相関＝.669）。効果量の順位双列相関はゼロ差を除いた順位に基づく。

重複回答の採用方法や保留記録の包含を変えても、直前・直後の上昇は一貫した。一方、１学期から直後の統計的判定は条件により変わった。したがって、継続的な上昇ではなく、１学期から直前に低下し直後に上向いた推移として捉える。低学年の表は回答者数の異なる集計であり、同一児童の上昇とは解釈しない。

このように、地域への興味が高まる方向の変化は一部の学級に限られず、高校生との関わりが、児童にとって地域へ関心を向ける機会になったと考えられる。一方、回答が変わらなかった児童にも、新たな気付きや交流への希望が記されていた。そこで、以下では回答が上昇したＡ・Ｂ児と、直前・直後の回答が変わらなかったＣ・Ｄ児を取り上げ、数値と記述を関連付けて、児童の受け止めを考察する。

（２）児童の言葉と、当日の場面からの考察

Ａ児（６年）の回答は２→２→３であった。直後には「町小の近くにある高校には明るくて一緒にいて楽しそうな人がたくさんいたこと」と記した。１学期と直前は否定側であった児童が、近隣の高校生を肯定的に捉える記述とともに、地域への興味も肯定側へ変化した。高校生を遠い存在ではなく、身近に関われる人として受け止めた姿と読める。

Ｂ児（４年）の地域への興味の回答は３→３→４であった。行事直前の質問２「高校生について、知っていることがあれば書いてください」には「わからないです」と記していたが、行事直後には、「南高校の演劇部のみなさんは、道具作りから、がんばっていて、さらに大きい声で見ている人に届けるということを工夫していることがわかりました」（事後記述より抜粋）のように記述した。さらに、放課後の練習や、ダンスを好きになる大切さも記していた。これらは当日の質疑の内容と対応し、完成した表現の背後にある工夫や努力を知ったことがうかがえる。

Ｃ児（５年）は４→４→４であったが、「近くで学ぶ高校生を見て、近くにたくさん練習をして頑張っている人がいることを新しく知りました」と記した（抜粋）。Ｃ児の記述には、身近な地域で活動する高校生の努力への気付きが表れており、「地域で学ぶ人とその学びに気付く」という観点から、最肯定の数値は変わらなくても、捉えが具体化したと読める。１年生の学級記録にも「げきのどうぐを作ることができる」という言葉が残った（抜粋）。低学年にも制作への気付きが記録されている。

Ｄ児（６年）は３→２→２で、「自分の学区内にある高校でこんな部活動があることを知れた」と記した。Ｄ児は、学区内の高校の部活動を知り、発表を面白いと捉え、一緒に活動する希望も示していた。一方、地域への興味の回答は行事直前から変わらなかった。その一因として、発表の面白さや部活動への参加希望という具体的な関心と、町小学区や新発田という地域への興味とでは、Ｄ児が回答する際に捉えた対象が異なっていた可能性が考えられる。高校生の活動への肯定的な受け止めが、そのまま地域への興味の選択肢の変化には結び付かなかったと解釈できる。

（３）郷土愛の醸成とカリキュラム・マネジメントの成果

以上から、小高連携を位置付けた学校行事をとおして、児童が身近な高校生の活動や努力を知り、地域への興味・関心を高めることにつながったと考えられる。Ａ児には近隣の高校生を肯定的に捉える姿が、Ｃ児には身近な地域で活動する高校生の努力を具体的に捉える姿が表れた。これらは、本研究で設定した「地域を肯定的に捉える」「地域で学ぶ人とその学びに気付く」という観点にそれぞれ対応しており、高校生との関わりが郷土への想いを育む契機となったと考えられる。興味の検定結果だけで郷土愛全体を証明したとせず、具体的な記述との対応から仮説を支持する成果として捉える。

【教科等横断的な視点からの教育内容の組織化】では、学校経営方針の「郷土愛の醸成」と行事のねらいを結び、高校生との関わりを、地域を新たな視点から見つめる機会として位置付けた。従来の図画工作科での作品鑑賞を生かしながら４年生児童の音楽科での発表等を加え、同年代の仲間の表現活動に触れる機会を設けた。高校生との連携では、演劇やダンスを生活文化や表現活動として捉え、発表や質疑応答をとおして、地域で学ぶ高校生の制作や練習、工夫や努力を知る機会を具体化した。

【教育課程の実施状況の評価・改善】では、当初の形への固執を避け、高校側の条件と教育的なねらいの両面からステージ発表中心へ修正した。さらに、校内の相談と高校との打合せをとおして、高校の紹介や児童の質問を組み込んだ。実施後のＢ児の記述からは、質疑が制作・練習過程を知る機会となったことが読み取れた。次年度も発表内容と児童の受け止めを照合し、改善策の視点の１つとしていきたい。

【人的・物的な体制の確保・改善】では、筆者が校内の意見を整理し、高校と時間・場所・役割・連絡方法を調整した。管理職による統括、教職員の見守りや個別支援、高校生・顧問の発表準備、関係保護者による楽器の準備・片付け等が実施を支えることにつながった。こうした関係者の協力により、初年度の行事を実施する体制を整えることができた。

（４）残された課題と次年度への改善

教職員アンケートでは、準備・片付けの作業負担について肯定的な評価が見られた。一方、情報共有や児童アンケートの実施方法については、改善に向けた課題が示された。次年度は、目的と年間の見通しを早い時期に共有し、学年等で意見や困り事を伝え合える機会を設け、担当範囲と連絡経路を明確にする。また、持続可能な行事とするために、複数の教職員が調整や運営を経験できる体制を検討する必要がある。高校生が準備する内容を尊重しつつ、発達段階に合う参加方法や、地域とのつながりが分かる紹介・質疑を相談する必要もある。さらに、これまでの栽培活動や飼育活動における高校生との関わりを充実させ、学校訪問やゲストティーチャー等の機会を検討し、年間をとおして設定したい。今回の実践で得た児童の姿を出発点に、郷土愛の醸成という目標に向け、小高連携という新しい視点を取り入れながら学校行事を改善していく。

引用・参考文献

相良誠司・児玉清孝（2025）「小学校キャリア教育の展開に資する小大連携・小高連携の試み―児童の『基礎的・汎用的能力』『自己肯定感』『学習の効力感』の向上をめざして―」『学校改善研究紀要』７，160-169.

村山幸子・倉岡正高・野中久美子・田中元基・根本裕太・安永正史・小林江里香・村山洋史・藤原佳典（2020）「児童・生徒のあいさつ行動と地域愛着および援助行動との関連」『日本公衆衛生雑誌』67（７），452-460.

文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』，39-42.

文部科学省（2017b）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編』，60-61.

分析資料：当校（2026）３～６年生及び１・２年生「３時点統合分析」暫定版（11 月２日）、教職員アンケート中間分析、当日の質疑応答の要約。